

機関番号：21201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18592382

研究課題名(和文) 造血幹細胞移植を主体的に受けるための患者支援プログラムの臨床導入と評価

研究課題名(英文) The clinical application and evaluation of the patient support program to blood stem cell transplant for the subject

研究代表者

森 一恵 (MORI KAZUE)

岩手県立大学・看護学部・教授

研究者番号：10210113

研究成果の概要(和文)：

本研究は、内発的動機づけに基づく認知教育理論を用いた「造血幹細胞移植を主体的に受けるための患者支援プログラム」を開発・臨床導入・評価することである。非介入群と介入群において介入前、介入終了後、介入後2週間の3点について二元配置反復測定分散分析を行った。その結果、日本語版 POMS の下位尺度の「活気」で交互作用について有意な傾向が見られた ($p < 0.1$)。Dunnett の方法を用いて、各群における「活気」の変化を確認したところ、移植に向けて非介入群は「活気」が次第に低下し、介入群は「活気」を維持できることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：

The objectives of the present study were to develop “a patient support program for patients to receive blood stem cell transplantation on their own initiative”, using a cognitive education theory based on intrinsic motivation; to actually introduce the program into clinical practice; and to evaluate its effectiveness. Two-way repeated measures ANOVA was performed using the Japanese versions of POMS and MAC before the start of intervention, after the termination of intervention, and 2 weeks after intervention between the non-intervention and intervention groups. The vigor subscale of the Japanese version of POMS showed a significant tendency of interaction with “at the time of response” and “the presence or absence of intervention” ($p < 0.1$). We confirmed the changes in vigor in each group using Dunnett’s multiple comparison method, which suggested that the non-intervention group had a gradual decline in vigor for transplantation, whereas the intervention group could maintain vigor for transplantation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,500,000	780,000	4,280,000

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：臨床看護学・がん看護

キーワード：造血幹細胞移植、患者支援プログラム、看護学、がん、移植・再生医療、患者教育

1. 研究開始当初の背景

造血幹細胞移植（以下、移植）を受ける患者は、十分説明を受け移植を納得して治療を決定した後もドナーの決定、再発などの不確実な要素を有する状況の中で移植までの時間を不安な状態で過ごさなくてはならない。移植の決定は説明から意思決定までの期間は短い、移植を待つ期間は長く移植を受けることに関する不安、将来に対する悩み、再発や経済的な問題に対する不安といった心理・社会的苦痛を経験する。先行研究において、移植の意思決定をした患者の内発的動機付けを強化・促進することを目的に、心理・社会的支援を含む系統的な患者支援プログラムを作成・実施し、有効性・実用性についての効果がみられた。そこで、本研究では、移植実施に至る期間において先行研究で作成した患者支援プログラムを成人の血液疾患患者に臨床に導入し、患者支援プログラムを適応した群（適応群）と通常のケアを受けている群（非適応群）で比較し、その有効性と実用性を評価することが求められる。

2. 研究の目的

研究代表者は、患者の自己決定を内発的動機づけに基づく認知教育理論を用いて、造血幹細胞移植を主体的に受けるための患者支援プログラム（以下、患者支援プログラム）を開発した。本研究は、開発したプログラムを実際に臨床に導入し、臨床での患者支援プログラムの継続を最終目標とし、以下の具体的な目標を達成する。

- (1) 造血幹細胞移植を施行している病院における看護援助の実態の分析し、プログラムを行う組織を構築する。
- (2) 造血幹細胞移植に携わる看護師に患者支援プログラムを周知する。
- (3) 現行のケア提供群とプログラム実施群の身体的、心理・社会的側面についてのデータ収集・比較しプログラムの評価を行う。

3. 研究の方法

(1) 看護師への半構成的面接紙を用いた面接を行い、造血幹細胞移植を施行している病院における看護援助の実態の分析し、プログラムを行う組織を構築する。

- ①対象者：病棟または外来で移植に6ヶ月以上携わっている看護師20名
- ②調査方法：半構成的面接法を用いて、移植に携わる看護師が移植前の患者に提供している医療情報、移植に携わる看護師が移植前の患者に提供している身体的、心理社会的側面への援助の内容と方法、移植に携わる看護師が移植前の患者

に提供している医療情報と援助の課題、についてオープンエンドの面接調査を行う。面接は、研究の説明を口頭と文書で行い協力が得られた場合、約30～60分の面接を参加者の業務に支障のない時間帯で行い、了解が得られた場合は聞き取り内容についてテープレコーダーに録音し、データとして蓄積する。

③分析方法：対象者の了解が得られた場合は聞き取り内容についてテープレコーダーに録音し、データとして蓄積する。データはまとめて処理し、対象者が現在提供している医療情報と援助の内容、現在提供している医療情報と援助の課題について表現している文を全て抽出し、内容分析を行う。内容分析の結果からプログラム導入に際しての看護師のニーズとプログラムの周知の際の重点ポイントを抽出する。

④倫理的配慮：研究者の所属の大学の倫理審査委員会及び研究対象施設で倫理審査を受け承認を得る。

(2) 作成した看護介入プログラムを実施するための資料の作成と、看護師へのプログラムの周知のための学習会の開催を行う。

- ①臨床現場の業務量に合わせ、実施可能な看護介入プログラムへ修正。
- ②プログラム内容について学習会の開催
- ③チームアプローチのための学習会の開催

(3) 現行のケア提供群（非介入群）の身体的、心理・社会的側面についてのデータ収集を行う。

- ①対象者：造血幹細胞移植を勧められ移植を予定している外来通院中または入院中の患者で、18歳～55歳の者、19名。
- ②調査方法：面接調査では、研究参加の同意が得られたのち、非適応群は適応群と同様の時期に面接を行う。調査内容は、病気・移植・自己の有能さについての認知に関する評価、気持の揺れの内容について半構成的質問紙を用いて、面接を行う。また、心理的变化を測定するために調査票（日本語版 POMS、日本語版 MAC、日本語版自尊感情尺度）を用いて調査を行う。面接内容は対象者の許可を得た後、テープレコーダーを用いて記録し、記録

できなかった内容を面接後に補足する。

- ③分析方法：非適応群の対象者の理解が得られた場合は聞き取り内容についてテープレコーダーに録音し、データとして蓄積する。データはまとめて処理し、内容分析を行う。
- ④倫理的配慮：研究者の所属の大学の倫理審査委員会及び研究対象施設で倫理審査を受け承認を得る。

(4) プログラム実施群(介入群)の身体的、心理・社会的側面についてのデータ収集を行う。

- ①対象者：造血幹細胞移植を勧められ移植を予定している外来通院中または入院中の患者で、プログラムに連続して参加できる18歳～55歳の者、17名。
- ②面接調査では、研究参加の同意が得られたのち、適応群は面接開始時を介入前として、介入直後、介入終了後2週間の3時点で評価する。調査内容は、非適応群の内容と同様である。
- ③分析方法：対象者の理解が得られた場合は聞き取り内容についてテープレコーダーに録音し、データとして蓄積する。データはまとめて処理し、対象者が現在提供している医療情報と援助の内容、現在提供している医療情報と援助の課題について表現している文を全て抽出し、内容分析を行う。
- ④倫理的配慮：研究者の所属の大学の倫理審査委員会及び研究対象施設で倫理審査を受け承認を得る。

(5) 非介入群と介入群のデータを比較しプログラムの評価を行う。

- ①半構成的質問紙による面接で得られたデータは、項目ごとに内容分析法を用い、適宜スーパーバイズを受けて分析を行う。
- ②調査票を用いて得られたデータは、適用群と非適用群で反復測定二元配置分散分析を用いて行い、対象者の背景は χ^2 検定およびt検定を用い、統計検定用パッケージSPSSを用いて分析を行う。

4. 研究成果

(1) 造血幹細胞移植に携わる看護師への面接調査の結果、面接の対象者は20名、平均経験年数13.0年、移植病棟での平均勤務経験4.6年、平均年齢34.9歳であった。

移植前の援助に関する課題は、<移植についての情報の過不足><移植に対する自己決定の難しさ><心理的支援の難しさ>などが抽出された。これらの問題を解決するためには、<時間を十分にかけた説明を行う><勉強会をして新しい情報を獲得する>などが課題としてある一方で、<成功の確率が低い治療をする患者に後ろめたい気持ちがある><患者の精神面を支える強さが看護師にない>など厳しい状況に看護師が苦悩している様子が伺えた。

医療情報提供を行うメディアが多様化し患者が簡単に情報を得られるようになった一方で、移植の選択が患者によって自己決定したとは言い切れないこと、前向きに取り組めていないことで看護師は患者に共感し支援することに不十分さを感じて苦悩していると考えられる。今後、患者が積極的に取り組めることができるような移植前のオリエンテーションの工夫、患者の心身への支援を行うために看護師が系統的に且つ簡便に用いられる支援プログラムの開発が重要であると考えられる。

(2) 非介入群(19名)、介入群(17名)を対象に日本語版POMS、日本語版MAC、日本語版自尊感情尺度について二元配置反復測定分散分析を行った。日本語版POMSの下位尺度の「活気」において「回答時点」と「介入の有無」による交互作用について有意な傾向が見られた($p<0.1$)。そのため、多重比較法の一つであるDunnnettの方法を用いて、各群における「活気」の変化を確認したところ、移植に向けて非介入群は「活気」が次第に低下し、介入群は「活気」を維持できることが示唆された。

移植前の超大量の化学療法や全身照射による身体的苦痛が大きくなる時期であっても、総合的な患者支援プログラムによって患者の「活気」は維持され、移植のために無菌室に収容されても患者は前向きにセルフケアに取り組めると考えられた。移植を主体的に取り組めるよう支援することは、患者の前向きなセルフケアを促し、苦痛の大きい移植中の生活においても、より患者の安全で安楽な質の高い看護が提供できると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 森一恵、三角葉子、福井真由子、湯浅美保子、他：造血幹細胞移植患者に看護師が提供している看護援助と課題、大阪府立大学看護学部紀要、査読有り、Vol. 14、No. 1、2008、1-7

- ②森一恵、造血幹細胞移植を受ける患者の内発的動機づけによる自己決定を支援するための看護介入プログラムの開発、日本がん看護学会誌、査読有り、Vol. 22、No. 1、2008、55-64
- ③森一恵、三角葉子、杉本知子：造血幹細胞移植前の患者の気分の変化と活気による移植前の認識の違いについて、岩手県立大学紀要、査読有り、Vol. 13、No. 1、2011、1-11、

[学会発表] (計4件)

- ①森一恵、小島操子：造血幹細胞移植患者に提供している看護援助と課題、第22回日本がん看護学会学術集会、2008年2月10日、名古屋国際会議場
- ②三角葉子、福井真由子、森一恵：造血幹細胞移植患者に提供している看護援助における看護師の苦悩、第30回日本造血細胞移植学会総会、2008年2月29日、大阪国際会議場
- ③福井真由子、三角葉子、森一恵：造血幹細胞移植前の患者の心理変化と看護援助の課題、第30回日本造血細胞移植学会総会、2008年2月29日、大阪国際会議場
- ④森一恵、三角葉子、小島操子：造血幹細胞移植前の患者の移植の受け止めによる気分の変化、第23回日本がん看護学会学術集会、平成21年2月7日、沖縄コンベンションセンター

[その他]

教育用パンフレットの作成

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 一恵 (MORI KAZUE)
岩手県立大学・看護学部・教授
研究者番号：10210113

(2) 研究分担者

河野 あゆみ (KONO AYUMI)
大阪市立大学大学院・看護学研究科・教授
研究者番号：00313255
小島 操子 (KOJIMA MISAKO)
聖隷クリストファー大学・看護学部・教授
研究者番号：50035333

(3) 連携研究者

杉本 知子 (SUGIMOTO TOMOKO)
神奈川県立保健福祉大学・看護学部・講師
研究者番号：00314922